

臨
子
校

叢
書

大
可
學
三
日

女子校 義理大可憐

二人の男が喫煙室で、彼等の新三学校時

代の話をしていた。Aが言った。可憐達、

学校では、階級、出雲の足跡があつたよ。

どんなふにだつて？ くん、ひどく不明瞭

つた。角張つた踵の靴の形でね。たしかそ

う記憶してゐる。階級は石の階級だつた。そ

の足跡の由来については、僕はどんな話も聞

いたことかやい。考えれば妻だろ？ たつ

て、何者か、その足跡を捏造するのみを知

れんかぬ。と

「君は、ちいさな子ども達に、そんな話を

してはならないよ。子ども達は、みんな自分

自分の神話をもっているんだものね。つい

で君の死ね、一つ論議をあげようね。

「^{おとこ}聖学校仲設」といふね。と

「お校はむしろさしくともだね。僕は思ふ」

んだが、たとえがもし君、子ども達が

ひる互いに話すよるを幽霊話の一群を研究

しようとするをい
オーストラリアの歴史
幽霊話はみんな、結局

歴探を多読書
本の話を歴探した 翻案した

つてしまふがらうに

口此頃ではストラランドやピアソン
（第十九世紀のイギリスの物）

理学者、物理学の哲
学的批判によつて有名
「といつた人の説を、ひろく

引用
そのためのねじ

「もうたくだ。あの人達の、僕の時代の生

れをいつたり、
僕らの時代
オーストラリアの歴史

らな。ん、待てよ。僕は、
話
何んな
要點

さかほえていゝかま。——まず第一に、ある

部屋をもつた家がある。その中に一組の人

々がいて、「夜をあめさうと言ひ張る。そし

て、夜をあけると、その人々はみよ、部屋の

隅つこの膝まがいていた。さうして「^{わし}張は

張を見た！」と^{（三いつちのと田）}と死な

だ——と

曰^れそ^はは、バークレー^{スケニア}街^区の、^身家^じや

あなつたかい？—と

曰^{（三いつちのと田）}さうだつたかも知れん。——と、^張

に往來でなにか物音がするるので、それを聞き

つけ友人が、ちんたろうと戸を明け急ぎ戻ら、

誰か四つんばいにして這いながら、

近のわい
まらまらまらまら

て来た。思ふと眼が頬筋に突き、頬の上へ

ブラキがつかいてゐるのだつた。いや、その

れ——待てよ——そうだ！

部屋の中で
ひとり

の男がベッドで死んでいた。その額には馬蹄鉄

の跡がついてあり、ベッドの下の床板にも、馬蹄鉄

の跡で一杯だつた。どろろたおけのおおどな

い。ま、こんな話もある。悪夢或る夢

家で、奥さんが寢室のドアに錠をおろすと、

カーテンの向から、"ああ、これで私達は今

晩中締めとまねたんだわ"という、細い聲が

聞えろそつた。そんな話には、どれも、説明

も議論もあつたもんじやない。美奈家には、

まじそつらんこと知つてりつた。お美奈。

別行一字リク

「ああ、お美奈のいかにありそつたこと

だ——僕が言つたように、雑誌のそんのおお

の、おまけを加えな話ぢやない。君は、我々

学校で、ほんとうの美奈の幽霊が出現して話と、

聞いたわけじゃあなからう？ 僕はそんなこと

とは考えもしない。今更僕の出くわしたど

ん人だつて、そんな考えをもつていん者は

ない。

曰君が さういふ言ひ方をすれば、 僕は君と

出雲話をもつてつくと推定するよ。

曰いや、實際知らな人だよ。だが、一つ

氣になつていゝ 話 がある。三十 何年か 年前、

後の学校で起つた事なんだ。僕もその説明

の加えようもないんだ。——

競技に巧みだといふわけでもなかつた。だが

彼は僕と気が合つた。

「学校は大き^かな^らな^つた。百二十人乃至^{二週り}

百三十人の生徒を収容しななければならなかつ

た。で、^{かたがひの} ^{数の} ~~多量な~~ 先生も必要だつたし、

^{時々} 先生の更迭もあつた。

「或は学期に——たぶん第三学期から第四学期

だつたと思うが——一人の新任の先生が来、

僕のクラスにあられた。サムフソン先生とい

つて、背の高い、髪ががっしりした、

顔色の蒼白い、影のあつたまゝだつた。僕達は

先生が好きだつた。先生は澤山旅行をしてい

られたので、数回遠足の時をいかに、おもしろ

い話をしてもうえん。先生の辭の聞えるものは

いよいよと驚くと、僕はよく押しあつた

とき。まゝうんちを記述もある——
うんち

僕はあれ以来まゝでそれを考えたこともない

んだが——
先生の 懐中時計の鏡は、ちい

さな飾りがついていた。蓋がある目録は

それに^心蓋をひかれた。先生はその飾りを僕

い豊よく見せそくなんすつん。今から思えば、

それは書~~き~~ビサンチン金化~~び~~だつん。一方に

は、たれのかおかしげな皇帝の像がついて

いんか

一方はほんところれ、すべすべ

~~書き~~
~~書き~~
~~書き~~

を~~の~~度 摺り入がさゆえんた。しめもせまは

そこへ、~~し~~著~~り~~、イニシアル自分の頭文字のG.W.Sと、

一八六五年七月二十四日という日附を、自分

で用~~は~~りつけていらぬた。そなた。僕は今でも

それを目~~は~~ほへるこゝろな~~か~~でき。せまはるの

金~~は~~を、コンスタンティノールで拾~~つ~~ん

だと言つていられた。それはフロリン「一八五〇年頃のイギリスの銀貨」

くさいの、いやあれよりずらうと小さなもの

だつた。

口とところで、^{はじめ}もう驚美の奇怪な事件が起つ

たのは、さうだつた。

口サウアツンセとは、僕達ラテン文法を

教へ^てる^を言^ひま^しめ^られ^た人だが、先生が^得

と名の教授法は——それはうまい方法だといつ

ていいんだが——^{「まが僕達」の頭び文章を}「先生が^得る^を言^ひま^しめ^られ^た人だが、先生が^得

で、それを土共主ん、学ぶべき規則を説明し

と合じられん。で、~~原~~大船の生徒は、

は新の文を記憶する”とか、”彼は彼の本を

記憶する”とかいつた、~~おれ~~みよまを扱ひ

たし普通の文章をいつた。 *memino librum meum*

「新は新の本を記憶する」と ~~書いた~~ のゑ、

一番多かつたよゝん思ふ。 ところが、

れ言つた ~~は~~ マクロードといふ生徒は、 ~~たの~~ さん

ことすけも、 ~~が~~ つと巧みな文章を考へたん

だぬ。 ~~ほの~~ ~~飯~~ さんは文章をパスさせるといつて、

もつと ~~さき~~ 進まうともふいたんと思つた。

で、机の上から紙を蹴った。僕は彼の隣りの

腰かけをいたんだが、彼をつついて、早くし

ろとききやめた。でも、彼は^手気がたつた。僕は

彼の紙さのをいと見え。まるでやんひと書い

てはいまい。で、すく^{胸で}僕は~~腹~~、前より強

くついと、僕達みんなを待たまきしやいけ

やいと、すどく比つた。きき目があつて、

彼は^{ハット}気を廻り直したように、手早く紙の

二行ほどなぐり書きをした。そして^{手書き}また

その紙を破りの生徒といつしおん

出した。それは諦切りの一言おしまいか、お

はおしまいい近い合掌だった ととろろ、サムゾン

in xmas is meminisimus patri meo (われ等はわが

祖先を記憶す)云々と書いた生徒達、あれ

かどてどて言 つていられ ~~われ等は~~ だの ~~で~~、マクロード

の合掌書の書いたる前、とろとろ十二時の

時計の鳴った。で、マクロードは、あとに残

つて、文章を直してとりわけばなふなかつた。

別行一字サケ

日僕の教室を出た時、そとにはいくらの生

徒も出ていたかつた。で、僕はマクロード

と、いふことゝんまぢい、いないなろく。

セニタイク
属格を
この上は

と、いふ。だから僕はこう書~~き~~いた。――

memento putei inter quatuor taxos (Be

の本の向の井戸を記^し境^せせよ)とぬ。" "ばか

な! どうしてそんなことを書いたのか

? "そりやちんのことだ、~~すもりのことを~~い?"と、

僕が言つた。"するとマクロードはこれえん。

。そりやあまてこさ。僕いもちんのことか、

はつまりあなをい。あかつていふことは、そ

人な
よ、昔、ふつとあの時頭のをめんほめんだ

奴を顔させられた。僕の文を讀む有り椅子から

立ちあがり、暖爐の方へ行かれた。僕の背

を向けたまま、おいぶん長い間を人のしきり

をいで、じつとくらくらされた。そりて振り返

えりしなりで、静かに、お前の文章は、ど

ういゝ ^{意味} 多量な人かと訊かれた。僕は思

つた通りと言つた。だがそのはあげた本の名

を ^{おけは} 思い出さ ^せ なかった。するとこんどは、おん

のつもりで、こんなことを書いたら、 ^話 書

どりんといわれた。で、僕は ^耳 耳を ^{説明} 書

刑部一守リケ

したまふやうなふたつだ。そのあと、先生は、
 もう文章について勉強することはやめて、僕
 がこの学校にまゐり、どれくらいにやるとか、
 僕の御甲はどこかだめ、そついつたことを訊
 みた。それだけ僕はそとへ出たんだが、先
 生は、あまりいい顔はしていらねえわつた。
 〇このほかに僕達にどんなことを言つたか、
 僕はおぼえてない。空朝マクロードは悪寒おん
 のようにやまものを感じて、ベッドにうつた。僕
 がまゝ学校へ出たわ、よりのまわるとは、一

たか、

用論のそれ以上もめかつた。それより一月

ばかりの間、それといふことも起らなかつた。

マクロードの考へええよ、サムソン先生

のほんとうに^{おひ}おもしろいのか、先生はそれ

を^{おひ}色りを出されなかつた。

^{おひ}先生は、先生

の過去の歴史、^{おひ}なりのひどく^{おひ}多量な事のこと

かあ、^{おひ}先生はよく^{おひ}思ひなさいか

^{おひ}信じなさい

つた。しかし、これは、おれおれと徒ら、こ

ろく事を見ぬくほど、鋭敏だつたと^{おひ}言わ

とてゐるのではなからうよ。

おしなまの
ことごと

「す」と「ま」は、僕が言つたと同じよりを

出 ~~ま~~ま事か起つた。その日以來何度か、学校

で、僕達はラテン文法をいふんを規則を学ぶ

ため、例文をいふをいふをいふが、

僕達は、まちがつた文章をいふ時のほめは、

先生の、お小言を受けなくてはなかつた。そ

のうちに、僕達は約束法という、
ある日 めんどうな

文法 きりとりあひ 未未

形でありわす文を作れと、いいつけられた。

僕達は、出来たり出来なかつたりの ひか ひか

を提出した。サマソン先生は、それ書に目
 を通しはじめられぬが、たちまち椅子を立つ
 く、あなたの喉を奴に喰ひしなから、
 テス
 クのついおきんあるドアから、飛び出されぬ。
 一二分後には腰をけられままでつんぬ、
 僕はあ
 りの文章に誤りでもあつたのぬと思つた。――で、
 僕と ~~書~~ ひとりふらりの生徒が、
 テス
 クの上にある合衆本をのぞきん行つた。まづと、
 誰のぬぼぬげぬとて書いたので、
 せんせぬと
 の生徒を呼びん行ぬぬぬぬと思つた。

それを持つていふと思ふ。 （それ） どんまことが書か

れていふかといへば、それはまゝで （まゝ） 筆をい

てみる。之句をゆめだつた。—— Si tu non veneris

ad me, ego veniam ad te. —— へたり、L

しあつたの所のところへ来るいふ、私があ

なたのさへ行きますよ」といふ意味だ。』

『その紙を ~~見~~見せてもらふのぬ？』と、

こゝまで紙を ~~見~~聴いていふ男はよかつた。

『ああ、見せよう。——とところで、その紙

はつては、まゝ一つ物まゝとがある。』その

日の午後、僕は、戸棚からその紙を出して見

た。僕はそれが、その同じ紙だといふことを

確かり認められた。だから、その紙に **念**の

たの梅印をつけておいたんだからね。 とこのころか
まうでかなく存つてい

紙には **書** を書いた文字が **書** のだ。今もい

つた通り、僕はその紙を保存して置く。そし

て、僕は、**隠** **顯** **イ** **ン** **キ** **デ** **モ** **使** **ッ** **テ** **ス** **レ** **ヤ** **ナ**

い **ル** **ト** **考** **へ** **テ**、 その紙 **い** **ろ** **い** **ろ** **験** **シ** **テ** **み** **た** **ん** **だ**。 **お**

お、 **ま** **う** **で** **か** **く** **存** **つ** **て** **い** **ま** **し** **た**。

日まあ、話を進めようが、三十分ばかりして

サムソン先生は、戻つて来られた。そして

どうも気分が悪いから、みんな帰つてよろし

いと云われた。先生はむしろ静かなデスクへ

行かれた。そして一番上の段に、^{御の}すわちよう

と目を落された。夢~~は~~先生は、^は自分で夢でも見てい

るんじゃないかといふ話をされた。とりかく、

先生はもう、なんでも訊こうとされたわけだ。

別行一筆ササ

四その日は、半どんの日だつた。四五日、サ

ムソン先生は、いつしんがわす、学おねへ

出られた。その晩のことだ。第三の、そして

最後の事件の起つたのは。

ヨシとマクロードは客宿会で宿る。客宿会

は本館とは真南になつていて、その二階には

サムソンとさきおが宿つていられた。實にあめ

の満月の夜だつた。正確に言うことはできな

い、たゞ、たゞ、一時と二時の間だつたと思ふ。

彼は誰かの様子を起さねえ。見ればマクロード

だ。あなたの^{せいかせいかし}まゝな様子で、
「おい、

な棒だよ。サムソンとさきおの部屋の中へ、は

いつたよ！」と言つた。しかし、^大な^声で、

みえを早起きなのかい？と、僕は早口の

いさよなげ

と言った。いや、誰だかよくわかるかいんた

うね。騒いじやうけな。まあまあどらん

よ。と、彼は言った。僕はひどく焦れて、マ

クロードの名を、ひやみん呼ばうともうた。

ただ——
自分もや
~~無言無言~~あけはあらか あいら ~~あいら~~か——

なりの専事があつたように思えもし、
~~あいら~~

れに自分一人で面うするのうたとは、
ほんとい
~~あいら~~

よあつたと思つた。

僕は二人は、とつと窓の下のをき出して

いた。羨望を ^{いざな}口早やれ、どろろとマクロード

^かこの ^{物ま}羨望を同きつけたのめときいた。『僕

は ^{まご}存人にも、同きつけたんじやないよ。だが、

君を起す ^{まご}羨望五合ばかり前々、僕はいつの同

いぬこの窓あぐのをき出したいたんぬよ。す

ると、サムソンは ^{まご}羨望の ^{まご}窓開け、一人の男が

ゆいぬを舞りかけて、中さのをき込みながら、

手探きしてつるよろじやないか。』と、僕は答

えん。『どんな風の人だい？』と、ころきくと、

マクロードは、逃げを法よりぬ、『おれ

さい。たか一つ——その男は、氣味わるく瘦
 せこけていて、かいた中ずぶ濡れのようにたつ
 た。" そう言いながら、~~あ~~ マクロードはあ
 りを足まわして、まるで自分にも聞えな
 いほどの小聲で、"僕はどろろとも、その
 田か、生きてる人とは思えなかつた。"

"僕は、よくしほく ~~き~~ ひそひそ話を
 つづけた。" ~~そ~~ とろとろベッドへもぐりこ
 んだ。床の下の話し、この向い目をさすしなり

身動きのしなりのあつた。

それから
 僕は

に思われる。この事件については、お金の疑

向も ^{向けが} 疑わしい。もし疑問が ^{ある} ありと

すれば、僕は僕達のどんを答えるよりし得ない

^{と信ずる。} ^{お金の疑} 僕達はこの事件について、^解 辨明

することには不可能に思えるのだ。

曰—— ^{以上} 義が僕の証言と、語り手は言つ

た。曰学校の関係した ^{ゴースト・ストーリー} 義談に近いもので、

僕の知っている唯一つの証言。だが、それら

し、僕は ^{ゴースト・ストーリー} 幽霊譚といつたもの、近

いと考えてつづたわけかゝるのだよ。

*

この事件の後日譚があるとするは、おそい

く極めて月並みの後日譚書が加えられる筈

である。たゞ後日譚はある。たゞそれを提

出しなればならぬ。この話の聞き手は、

一人だけではない。く、もつとあで、その年の終りだ

つちかゝる三年たつちか、くらくら別の聞き手の

一人が、アイルランドの聖・田舎書(の宿)の

帯にしていた。

或る晩のこと、宿の亭主が、喫煙室で、か

別行一筆リタ

いくた物を一紙に 入れた 抽斗ひきだしをひっくり返え

した。すると亭主はちいさな函はこの手を置いて

言つた。曰あなたは、古物こぶつのついではおく物

しつてしよ。これはなんでしよか？と

私の友人——~~誰か~~の話の聞き手の一人——は、

その中函ちゆうかんを開けた。中から飾りのついた細い

金鎖かねづらが出て来た。彼はその飾りかざりをこまめこまめに調しらべ

へるため、眼鏡をはずした。曰これにはな

か由来があるのかね？と訊くと、曰それが

まうなく奇妙なことでしよ。あなたも、あの

滝木林の中の、

~~水松~~ 水松

の養りを維持してい

よう？ 一二年前のことですが、新葉は、

この空にあり、古井戸を浚えたのを。

そこみふなりが出ると思いませんか？ 山といふ答

えだつん。

骨 ~~骨~~ 骨 出た とて いふのぬ？ 山と、

友人は、妻の神経過敏なつて言つた。

曰ええ、そうですね。 ~~骨~~ 骨 出たのでよ。し

のし ~~骨~~ 骨 とんでもない話ですが、二つ

まで ~~骨~~ 骨 出たのでよ。山

「ほろ！ 二つとね？ どうしてその二人

の井戸の跡ぢやなか、わがらないのぢやね？」

の鎖は、それといつしよに出て来たのぢやね？」

別行一字リタ

「そうですね。一人のほろび着てらん、ほ

ろ着物の中から出て来た人です。 どんをわけ

かあるのぢやね？」

一方の辰野^か両手で、もう一方の辰野は、し

つかりわらみついてらました。 二つの辰野は、

三十年かそれ以上も、井戸の中いたたて

のぢやませへ。 — 結達如くで宿をはいり

なよりも、あつと前のことですよ。あなたも、
 私達のその井戸を掘りしつゝ埋めてしま
 つたことは、想像がつくでしょう。あなた
 は、手にお持ちのその金貨の金貨は、どん
 どんことお回りつけてあるか、おあがりによ
 うか？、と

曰ああ、おあがりさうだね。と、友人は、そ
 れをたぐりあがしやうかい、（だが、こつぱさ
 ほどの困難もなうその文字を讀んで）言つ

だ。曰 G. W. S. — 一八六五年七月二十四日

41

—と聞つてあさふしな。